

草が踊る

天理大学国際学部教授
中 純子 Junko Naka

動物はもちろん、昆虫でさえ、音楽に反応することを、中国古代の文献のなかにもみてきたが、植物はどうであろうか。最近では、植物にどんな音楽を聞かせたら生育がよくなるかという研究も盛んらしい。ネットを検索すると、「音楽が植物に与える影響」や「植物の成長と音楽との関係」などの研究成果が立ちどころに現れる。総じて、音楽を聞かせるほうが植物の生育がよく、なかでもクラシック、とりわけモーツァルトの曲が植物のお好みとのこと。ただ、なぜクラシックなのか、なぜモーツァルトなのかは、これからの研究が待たれるようである。

踊る虞美人草

中国古代においては、生育という長いスパンにおける音楽の影響ではなく、もっとダイレクトに音楽によって植物が踊るといって極めて不思議な話もある。奇怪な逸話を集めた、唐代後期の段成式(803～863)の『酉陽雜俎』に、以下のようにある。

舞草は、雅州(四川省)にあり、一本の茎に三枚の葉っぱ、葉は決明という植物に似ている、一枚の葉は茎の先端に付いており、ほかの二枚は茎の半ばに、相對して付いている。人が近づいて歌ったり、手拍子しながら曲を謳うと、必ず動き出して、葉っぱが踊っているようだ。

(舞草、出雅州、独茎三葉、葉如決明、一葉在茎端、兩葉居茎之半、相對。人或近之歌及抵掌謳曲、必動、葉如舞也)
〔『酉陽雜俎』前集卷十九〕

この唐代の文献では、人が歌ったり手拍子して謳うのに応じて踊る植物の形態が記されているだけで、それが何故起こるのかについて言及はない。その理由を明確に示したいという意識は、宋代初期に編まれた沈括(1031～1095)の『夢溪筆談』には読み取れるようだ。

高郵(江蘇省高郵県)の人、桑景舒は生まれつき音に対する感覚がするどく、あらゆるものの音を聞き分け、すべてその禍福を占うことができた。とりわけ音律に詳しかった。ふるくからの言い伝えでは、虞美人草は人が虞美人曲を演奏すると、枝葉をすべて動かすが、ほかの曲ではそういうことはなかったと。桑景舒はそれを試してみたが、やはり言い伝えの通りだった。そこでその曲の音を調べてみると、みな呉の音楽であった。ある日、七絃琴をもって試しに呉の音楽を使って一曲をつくり、草に向かって演奏してみた。枝葉はまた動いたので、これを「虞美人操」と呼んだ。その曲調は虞美人曲とはまったく違っていて、始めから終わりまで一つも似た音はなかったのに、草がこれに反応したということは、虞美人曲と「虞美人操」が異なるのは、律法同管である。桑景舒が音を知ることにはこのように妙絶であった。桑景舒は進士に及第し、州県の官吏として一生を終えた。いまも「虞美人操」は広く各地で流行しているが、どのようなものが呉の音楽なのか知る人はない。

(高郵人、桑景舒性知音、聽百物之声、悉能占其災福。尤

善樂律。旧伝有虞美人草、聞人作虞美人曲、則枝葉皆動、他曲不然。景舒試之、誠如所伝。乃詳其曲声、曰皆呉音也。他日取琴試用呉音製一曲、對草鼓之。枝葉亦動、乃謂之虞美人操。其声調與虞美人曲全不相近、始末無一声相似者、而草輒應之、與虞美人曲無異者、律法同管也。其知者臻妙如此。景舒進士及第、終於州県官。今虞美人操盛行於江湖間、人亦莫知其如何者為呉音) (『夢溪筆談』卷五 樂律一)

唐代の『酉陽雜俎』には、ただ「舞草」とあっただけで、草の名前もそれが反応するという楽曲についての情報も見えなかったが、『夢溪筆談』で「虞美人草」というのは、項羽の寵姫の名を用いて、虞美人が項羽との別れに舞った故事を背景にしていることは言うまでもない。不思議な現象に物語性を付与しているようにも感じられる。音に精通している桑景舒は、呉の音楽を使って虞美人曲とは全く異なる「虞美人操」なる曲を作り、草に聞かせる。それに草は反応した。呉の音楽であれば草が反応することを突き止めた桑景舒にとって、草が踊ることは不思議ではなくなり、ひとつの自然現象として受け入れられたようだ。しかし、今の我々からすると、虞美人曲で草が踊ると、呉の音楽に反応して踊ると、どちらも不思議であることに変わりはない。

律法同管とは

虞美人草が踊る理由とされた「律法同管」とは、どういうことか。沈括が『夢溪筆談』で楽律を論じたところにこの話を持ってきているのであるから、音律について説明していることは確かである。律法とは、辞書によると、律呂の規則のことだそう。さらに『通典』巻一四三「樂三」の「五声十二律旋りて相宮と為る」の条に、「伏羲氏が易を作り、陽氣の初を紀して以て律法と為す」とある。ここに、律法とある言葉の意味は、そのあとの記載から類推するしかない。『通典』は続いて、黄鐘・太簇などの十二律が宮・商などの五音に当たることを述べ、黄帝が楽人伶倫に鳳凰の十二の鳴き声に合わせて竹を切らせて十二の管を作らせたこととある。つまりは、「律法」は、十二律と五音の創り出す中国の音律の規則であり、ついでに「同管」は、竹管の同音ということを行っているのだと考えるのが穏当のようである。中国人は古代から、音の共鳴現象を知っていたことは以前述べたが、桑景舒は虞美人草の曲と同じ調律である呉の音楽であれば、虞美人草は共振するという方向で考えて、納得したのであろう。

それから少し後、王灼の『碧鷄漫志』(紹興十五年(1145)成書)では、やはり舞草をとりあげている。彼は蜀にこの草があると聞くが、自分はまだ見たことがない、と前置きしながら、これまでにアレンジされた虞美人曲の果して古い曲に反応するのか、新曲に反応するのか。また呉の草と蜀の草は同類なのか、など様々な疑問を書き記している。おそらく宋代を通じて、舞草についてはっきりした結論は出なかったのだろう。ただ、疑問をなんとか解決しようと、いろいろと試みた桑景舒や、それをまた掘り起こしてさまざまな疑問を提起している王灼の姿には、クラシックのなかでもなぜモーツァルトが生育に効果的なのかと植物を凝視する現代人と変わらぬ探求の心を見て取れるようである。